九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二十世紀初頭、江西省の米穀流通と農村経済

金，勝一
九州大学大学院文学研究科

https://doi.org/10.15017/24611

出版情報：九州大学東洋史論集. 18, pp.87-124, 1990-01-25. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

二十世紀初頭、江西省の米穀流通と農村経済

金　勝一

一、はじめに
二、米穀需給の江西省の地域的特質
三、省内の流通事情
四、省外との流通
五、米禁
六、結　論

一、はじめに

生産物が生産者から消費者まで供給される過程で、その生産物の円滑な流通による均等な分配は、一般経済生活に於いて過去も現在も一番重要な問題であろう。この問題は結局どこでも解決されないまま、今までも人類全体の問題として残っている。しかし、このような問題は、今までの歴史発展過程からわかるように、支配階層の政治的道徳性、社会各階層の意識水準及び自由市場経済体制下での適切な牽制と均衡等によって、その状況程度と社会的発展方向が違った事実が知られよう。

このような観点から、二十世紀初頭の中国農村社会を観察すれば、当時中国農村が持っていた矛盾点及び農民意識の変化、そして社会主義社会への転換等を理解できると思われる。これは当時の中国農村社会が持っていた独特な状況であるかも知れないが、最近中国を含む社会主義国家が、マルクスレーニン主義の史的唯物論による一種の歴史法則に逆っている変則事

例を見る時、当時の中国社会が理念的、体制的転換よりも、社会経済の構造的矛盾の克服による、伝統中国の資本主義的産業社会への定着が、より中国の発展に寄与したのではないかと考えられる。

従って、本論文では当時中国で最も重要な経済商品であった米穀の生産、分配、流通等一連の交易過程の中で現れた問題点を、農村の社会経済構造の中で把握し、中国農民が中共の指導路線を受け入れるべき状況であったか、それはまた中国農民にとって、正しい選択であったかどうか等の問題を究明しようと思う。

江西省は特に中国の穀倉地帯である長江流域の一省であり、土地面積に対する稲田の比率が一番低い省であったにもかかわらず、米生産が湖南省に次いで多く、一九一五年以後小軍閥が離合集散した地域として、米禁、苛酷雑捐、土地兼併、田地荒廃等農村経済に大きな影響を及ぼした地域であり、一九二七年以後中共のソビエト建立、一九三一年以後中央ソビエト建立と土地革命の提唱は、当時農村農民の状況を理解するため、充分なモデル地域になろう。

一方、江西省の米穀流通状況を充分に理解すれば、その地理的位置により、長江流域諸省間の米穀交易状況と米穀市場の版図変化、外米の流入の影響等当時中国米穀市場の流れに対する全般的理解ができる。

故に、本論文では、まず江西省各地域の米穀生産状況と相互需給関係を検討し、省内外の米市場の状況と農村経済との関係、米禁が農村経済に及ぼした影響等を分析し、当時国共両党の指導路線に対する農民の心理動揺を考えようとするものである。

二　米穀需給の江西省の地域的特質

江西省は自然環境が辺遠地域の一部を除外し、すべての耕地が米耕作に適合している。[1] 一九三四年の狀況を見ると、稲作面積は三、二一九萬畝、大豆・小麥が四百餘萬畝、大麥が二百餘萬畝、綿花、油菜、花生が各々百餘萬畝となっているから、[2] 稲作面積が全土地の十五%に及はず、[3] 稲作が江西省で占める比重は必ずしも高くない。しかし、その生産量は湖南省の次であり、全中国の中では重要米生産地域であったとはいえよう。故に、江西人は習慣上米を食べたため、麥等雑量の生産が少なかった。[5]

生産時期と生産性は、地域と気候によって違うが、生産時期は二毛作の場合、早稲は四月初に播種して六月末に収穫し、晩稲は七月初に播種して九月末に収穫する。[6] 大略二毛作可能地域は贛西南部の一部地域であったが、一九三〇年代中期、政

府当局が農業改良事業を推進するまでは、投資額の割には生産額が少なかったのであまり行われなかった。[7] 故に二十世紀初頭まではほとんどが一毛作であり、農民は収益性が高い上質の晩米を主に耕作した。生産性は上等田と普通田の平均額が毎畝当り穀三石九斗一升であったが、飯米にするとわずかに一石八斗であった。[8] このような46％の低い精米率は、精米技術とも関係があるが、直接的には粘性がない米自体の劣悪性に起因すると思う。その生産性は長江流域の諸省と比較すると、非常に低かったといえる。[9]

江西米の質と生産性が全般的に劣ることは、雑税の加重、租田制度の不合理性、天災、人災といった問題とも関係があるが、耕作技術や品種改良が遅れていたこととも関係があったといえる。[10] このような状況は、当時の省政府当局と清末以來設立されてきた各種農業機関の行政及び農業政策が形式的であったことを示しており、[11] このような状況はまた中共が跋扈して土地革命等農村・農民に対する政策が提起された時まで継続された。[12]

このような農業生産の不振は農村経済の衰退を意味しており、農業経済を根幹とする江西経済の破産を意味しよう。このような全般的な江西米の劣悪性の外に、各地域別の米穀生産状況、流通過程等を見れば、米穀商品経済市場の未発達及び農民の心理的衝撃等江西農村の危機状況がさらに詳しく解明されると思う。

本論文では江西省の各地域の米生産と消費・地域間の米需給関係等を分析するにあたり、米生産量・人口・交通・政治的状況・土壌・気候等により、図一のように六個の地域に分けて比較検討していく。（参考：図二・三・四・五）

各地域の特性を見ると、左のようである。

図1　江西省各縣分区図

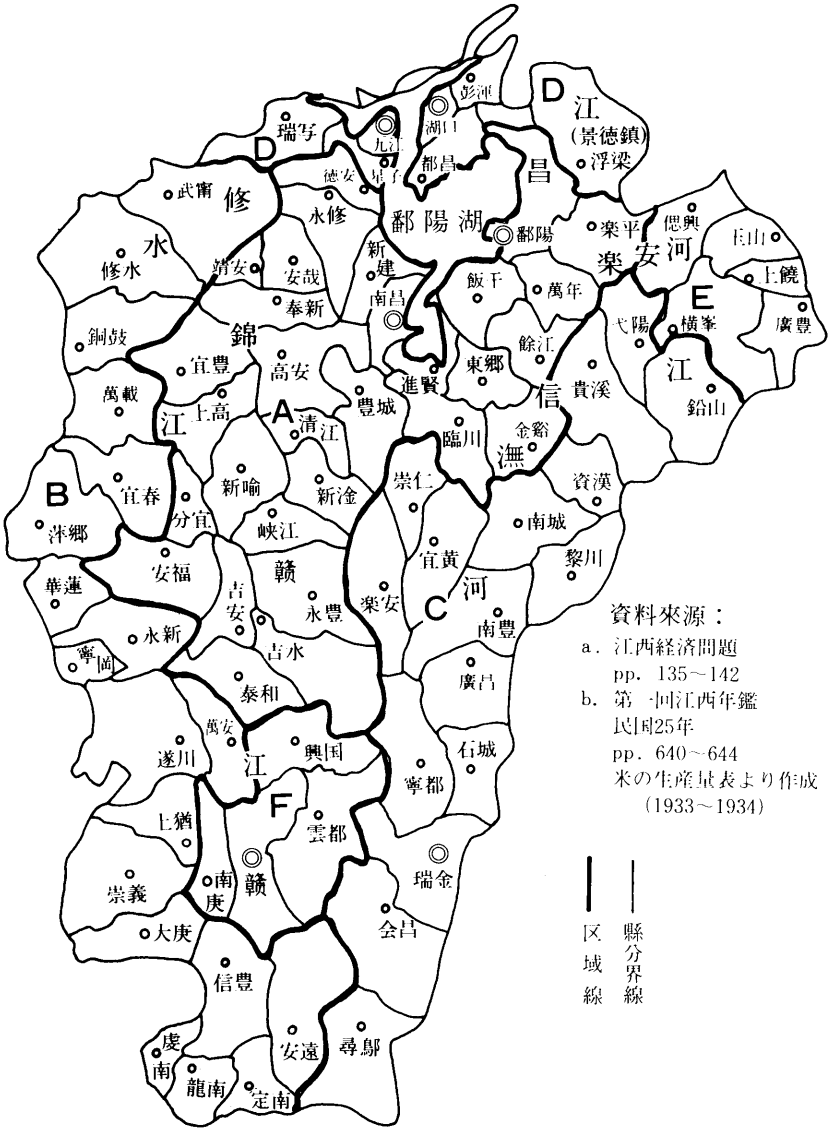
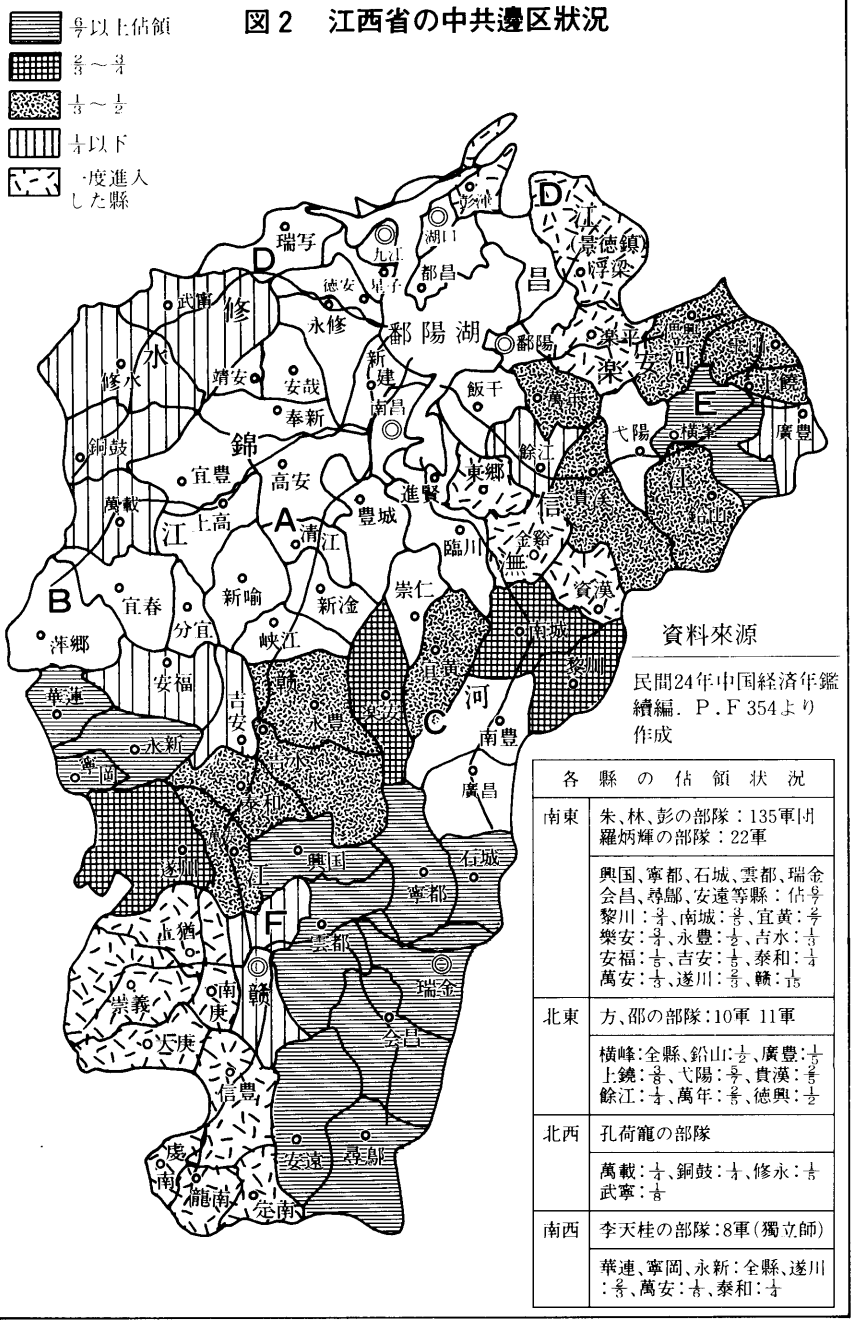

彭澤
湖口
九江
都昌
D
江
(景德鎮)
浮梁
瑞写
D
武寧
修
水
修水
靖安
安哉
奉新
德安
星子
永修
鄱陽湖
鄱陽
樂平
樂安河
E
上饒
廣豐
新建
南昌
飯干
萬年
弋陽
横峯
銅鼓
錦
江
宜豐
高安
萬載
上高
A
清江
豐城
進賢
東郷
餘江
貴溪
信
鉛山
臨川
金谿
撫
資漢
B
宜春
新喻
新淦
崇仁
萍鄉
分宜
峡江
南城
宜黄
黎川
華蓮
安福
吉安
贛
永豐
樂安
C
河
南豐
永新
寧岡
吉水
廣昌
泰和
萬安
遂川
江
興国
石城
寧都
F
上猶
雲都
瑞金
崇義
南庚
贛
会昌
大庚
信豐
虔南
安遠
尋鄔
龍南
定南
資料來源：
a. 江西経済問題
pp. 135～142
b. 第一回江西年鑑
民国25年
pp. 640～644
米の生産量表より作成
(1933～1934)
区域線
縣分界線

図2　江西省の中共邊区狀況



資料來源

民間24年中国経済年鑑續編．P．F 354より作成

各縣の佔領狀況	
南東	朱、林、彭の部隊：135軍団 羅炳輝の部隊：22軍
	興国、寧都、石城、雲都、瑞金 会昌、尋鄔、安遠等縣：佔8/9 黎川：3/4、南城：3/8、宜黄：2/9 樂安：3/4、永豊：1/2、吉水：1/13 安福：1/5、吉安：1/5、泰和：1/4 萬安：1/3、遂川：2/3、贛：1/15
北東	方、邵の部隊：10軍 11軍
	横峰：全縣、鉛山：1/2、廣豊：1/9 上饒：3/8、弋陽：8/9、貴漢：2/5 餘江：1/4、萬年：2/5、徳興：1/2
北西	孔荷寵の部隊
	萬載：1/4、銅鼓：1/4、修永：1/5 武寧：1/8
南西	李天桂の部隊：8軍（獨立師）
	華連、寧岡、永新：全縣、遂川：2/9、萬安：1/8、泰和：1/4

図 3　江西省分区地勢図

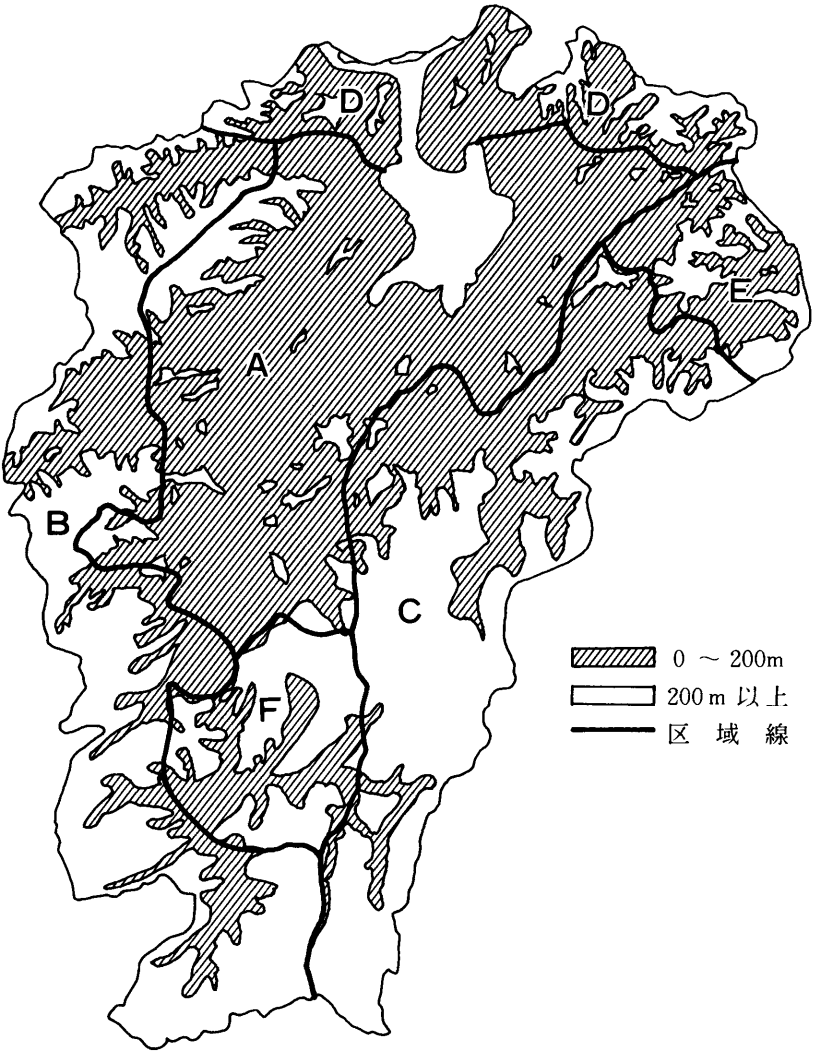
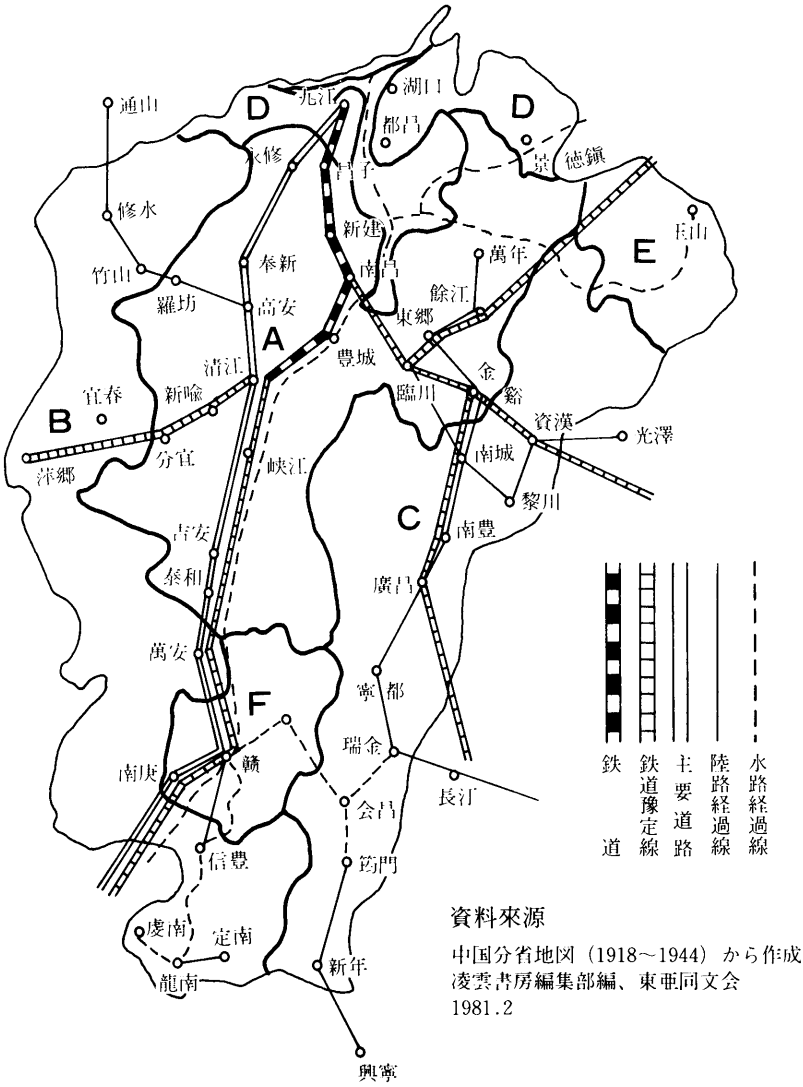


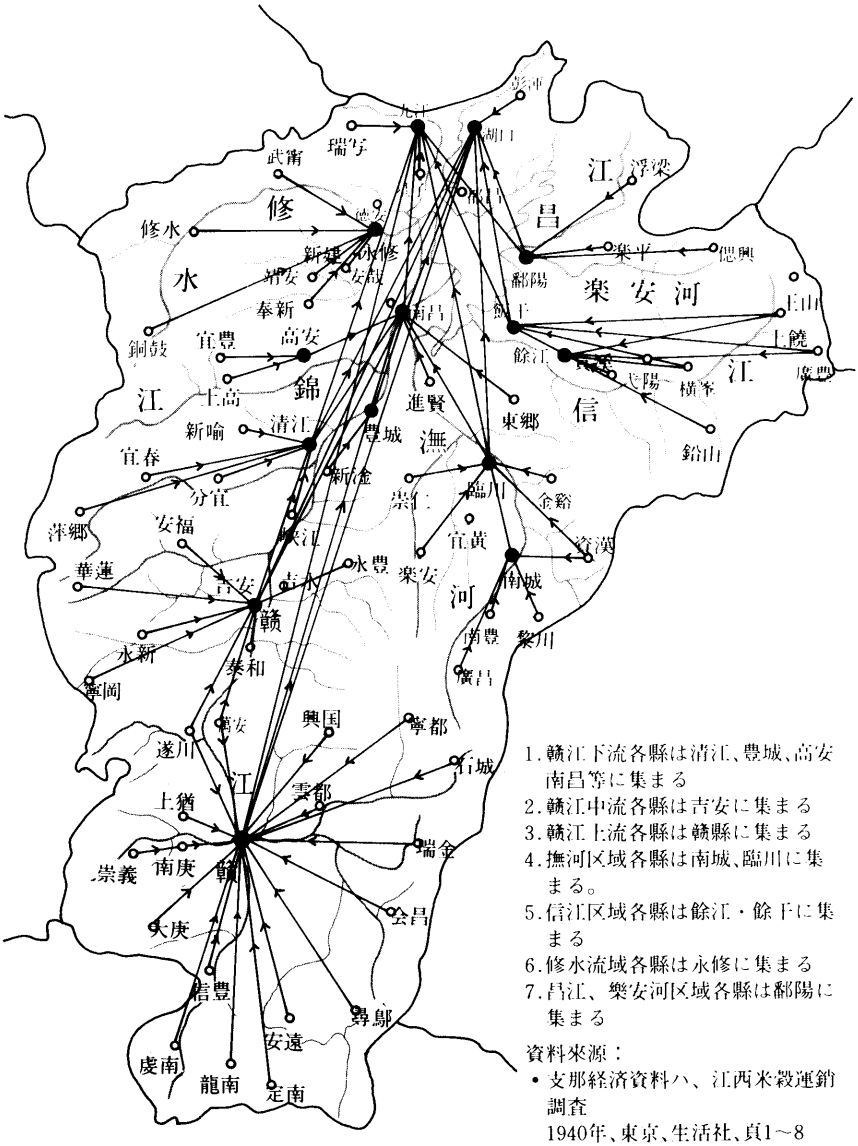
図4　1921年江西省陸水上交通図



資料來源

中国分省地図（1918～1944）から作成
凌雲書房編集部編、東亜同文会
1981.2

図5　江西米穀集散趨勢



1. 贛江下流各縣は清江、豊城、高安南昌等に集まる
2. 贛江中流各縣は吉安に集まる
3. 贛江上流各縣は贛縣に集まる
4. 撫河区域各縣は南城、臨川に集まる。
5. 信江区域各縣は餘江・餘干に集まる
6. 修水流域各縣は永修に集まる
7. 昌江、樂安河区域各縣は鄱陽に集まる

資料來源：

- 支那経済資料ハ、江西米穀運銷調査
  1940年、東京、生活社、頁1～8
- 支那経済資料七、江西糧食調査
  1940年、東京、生活社、夏16～18

A区：贛江中下流平野地域。全省の交通の中心地であり、主要米生産及び輸出地域である。
B区：西辺地域。地勢と土壌が不良であるため、米産量は自給自足が可能な程度である。とりわけ北部の武寧・修水・銅鼓等三縣は丘陵地帯であり、地盤が固いので茶の生産を主としているため、米の自給自足さえ不可能である。
C区：東辺地域。米の生産状況はB区と似ているが、中共の占領以後、食糧不足現象が起こった。
D区：北端地域。米穀の対外輸出地域であるが、当該地域は気候と土壌が不良であるため、米生産が絶対的に不足している。故に商業と貿易、そして雑糧により、食糧問題を解決していた。
E区：東北辺区地域。気候・土壌が米生産に適していないので、その代わりに煙草の栽培が多い。ところが中共の興起以來浙江省に流入しようとする人々が増え、人口が急速に増加したため米穀の最大輸入地域に転化した。
F区：南部中央地域。行政、交通、商業の中心地域として米穀の純消費地域である。さらに、気候が不良であるため、米の生産も少なく、雑糧の生産もほとんどなかった。故に、米の交易を通じて民食問題を解決しなければならなかった地域である。[13]

このような地域区分により、地域別生産能力と消費量の関係を見れば、表一の統計のようになる。

この表によると、江西米の生産性と耕地比率は大変低かったにもかかわらず、民食は充足していた事実が分かる。例えば、表二と表三からわかるように、一九二〇年代と一九三〇年代の米穀生産量と消費量を比較すると、毎年米穀約四六〇萬石から七八〇萬石の剰餘があった。[14] 故に全体的に民食問題はなかったように見えるが、実は地域間の生産差異と流通構造上の問題のため、地域によっては食糧不足及び米の商品化の限界性が現われていた。即ち、米の剰餘現象は民食問題の解決を意味しているわけではなかったと言えよう。表一と表四・表六から、A地区以外の地域では食米不足の狀況にあった事実がわかる。これらの地域はすべてが、山区地域・都市消費地域・人口集中地域・国共対立地域であった。その中で、特に食米不足現象が著しかった縣は28縣であった。總81縣の中で、28縣という数は$\frac{1}{3}$に該当するが、これは江西省が全体的には米剰余省でありながら、省当局の行政・経済政策に多くの問題点があったことが知られる。(参考図六)

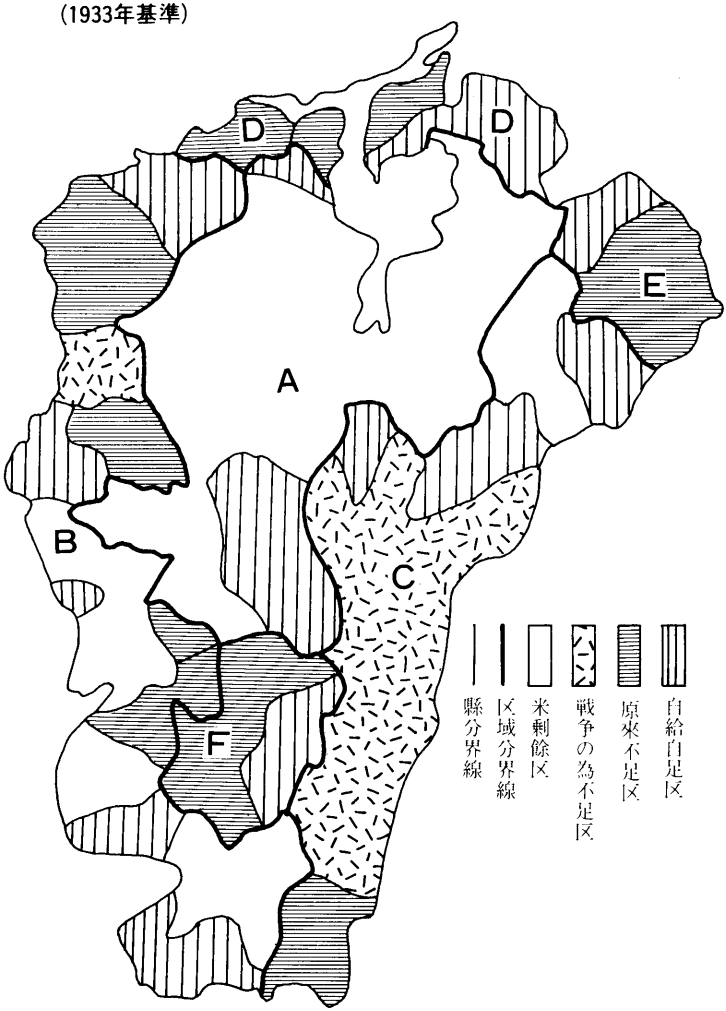
さらに、他の自給自足地域と剰余地域も、商人・軍政等支配層が利益を独占していた狀況から考えてみると、[14] 民食問題による全省の社会的矛盾の深刻性を理解できるであろう。

当時の米不足地域の原因を見ると、表五に見えるように、国共両党の戦争による県が11県で一番多かった。それは当時軍

閥当局の無爲無策と、その戦争の目的が両党相互間の政治的権力闘争だけにあり、農民の民生問題には関心がなかったことを意味しよう。また、気候・土壌の不良による食米不足県も10県に至ったということは、清末以後、江西省当局の農業政策が完全に形骸化してしまったことを意味しよう。[15] 表六によって米の代替食糧たる小麥と大麥の栽培について米移出地域であるA区とその他の地域を比較すると、A区地域以外ではその生産が大変少なかったことが見える。即ち、D地域以外の地域では、全然代替食糧の改善がなされなかった狀況を分かる。勿論、これらの代替食糧の栽培が、気候・土壌にあわないこともあったと思われるが、それ以上に品種改良・耕作方法の改善・新品種の移植等の農業政策がおこなわれなかったことがもっとも重要な原因ではないかと思う。[16] 特に、C区とF区はB区とE区より栽培條件がよかったにもかかわらず改良されなかったことは、省当局の農政がいかに形式的であったかが想像できよう。E区とF区では人口が集中したので、食糧不足現象が現れた。これは中共の土地改革と階級闘争の圧力から脱出するため、隣近の浙江省と当時行政首都があった贛県の治安が比較的安定していたために起こった現象であると思われる。これらの地域は人口集中以前には、煙草等商品作物の栽培と穀物の取り引きを通じて食米問題を解決していたが、人口集中以後はその方法による解決に限りがあったといわれる。[16]。これも国共両党の政治闘争下に現れた商品流通の阻害及び地域間分配の不均衡のためであると思われる。

しかし、最大の問題はA区の剰餘量の移出問題であった。A区の剰餘米はほとんど省内外に移出されたが、地理的・交通的要因、あるいは軍政商人階層の利益等により、移出地が決められた点に問題があった。即ち、実際上米穀が必要な地域より、運送費が安い所と輸出時期上、手続き上利益が高くなる地域だけに移出されたので、実質的な米需給は全く不可能であったのである。例えば、当時の重要な交通手段である水運は、上行と下行の運賃格差のため、ほとんどが下行によって下流地域だけに移出され、軍政階層による米禁の実施は、私運・密輸出・囤積・買占め売り惜み等の現象を惹起し、流通構造を破壊した。故に、地域間の分配の不均衡・米穀の商品化の阻害等農村の市場経済及び民食問題に大きな影響を及ぼしたのである。このような狀況は次の章でさらに詳細に分析する。

図6　各区米生産状況
（1933年基準）



資料來源：江西経済問題、台北、学生書局、1971年
pp. 135 ～142
民国25年、第一回江西年鑑、pp.640～644
米の生産量表より作図（1933～1934）

表１、贛省地域別米穀生産量及び消費量

区域	縣数	人口[a]	%	産額[b] 石	%	毎人平均所得[c]	毎人所得量と消費量の比較[d] 斤	各区全体所得量と消費量の比較[e] 石
A	30	5,626,469	41%	66,024,919	59%	1173斤	+425斤	+23,912,493
B	19	2,638,462	19%	18,509,843	17%	702斤	−46斤	−1,213,693
C	16	2,465,072	18%	12,622,204	11%	512斤	−236斤	−5,817,569
D	7	1,211,235	9 %	5,127,461	5 %	423斤	−361斤	−4,372,558
E	5	823,985	6 %	4,294,320	3.8%	521斤	−272斤	−1,870,439
F	4	1,031,800	7 %	4,849,450	4.2%	470斤	−278斤	−2,868,404
計	81	13,797,023	100%	111,428,197	100%	807斤		+7,769,830

〈説明及び資料来源〉

a．1933年の人口統計を基準として、未統計縣は1931年度数字を使って作成。江西経済問題、台北、学生書局、1971年６月、Ｐ．34－40。

b．1933年江西建設廳調査、米生産額、江西糧食調査、東京、生活社Ｐ．４－７（参考表三）

c．江西建設廳調査基準：穀毎石約100斤上下、故に一担谷約１石、ｂ÷ａ＝ｃ

d．江西毎畝当り毎年平均収穫量：穀子３石９斗１升→碾いて飯米となさば１石８斗である。（精米率＝46％）
毎人毎年米の最低消費量：米2.57石（大公報、1922．５．３支那省別全誌、湖北省、Ｐ545）。1930年代江西28縣の米１石当りの平均重量：約134斤（江西糧食調査・Ｐ．59～60より計算）
2.57×134斤＝344斤÷0.46＝穀748斤（0.46石米＝１石穀）

e．7,769,830×0.46＝3,574,122（米石）→江西米剰餘量（参考：表四）

表２　1930年代江西省稲穀産量の統計

年別	總生産額 石	統計者
1931	80,070,000	金陵大学農業経済系
1932	83,140,000	上同
1933	111,428,197	江西省建設廳
1934	92,062,956	江西省政府統計室
平均	91,675,000	

表３　1920年代江西米穀産量及び消費量（単位萬石）

年別	生産量	消費量	残餘額
産米最多年	7,020	5,541	1,479×0.46＝680万石
産米最少年	6,084	5,524	560×0.46＝258万石
産米中平年	6,502	5,532	970×0.46＝446万石
平均	6,535	5,532	1003×0.46＝461万石
資料來源：馮柳堂、「旱災與民食問題」東方雑誌、31巻18号、Ｐ．20			

表四、江西省各区米移出可能縣数

区域	米不足縣数	自給自足縣数	剰 餘 縣 数	計
A	0	4	26	30
B	7	6	6	19
C	10	6	0	16
D	3	4	0	7
E	4	1	0	5
F	4	0	0	4
計	28	21	32	81

〈資料來源〉
1．江西糧食調査、同前P．4～7
2．江西経済問題、同前P．134～142
3．江西年鑑、民国25年10月初版　P．634～644
4．支那省別全誌：江西省　P．507～533
等で1933年度を基準として作成

表五、各区の米不足の原因（1933年度基準）

区域	国共の戦争	天　　災	気候、土壌不良	人口の増加
B区	1　縣	1　縣	5　縣	
C区	8　縣		1　縣	
D区		1　縣	3　縣	
E区			1　縣	4　縣
F区	2　縣			2　縣

資料來源
参考表四

表6　1934年各縣小麥、大麥生産量及び面積

区域	小　麥				大　麥			
	縣数	面　積	生産量	%	縣数	面　積	生産量	%
A	21	434,740	559,155	42	18	327,500	600,423	51.2
B	11	215,480	237,853	17.7	5	84,300	106,909	9.1
C	2	26,300	38,820	3	3	15,000	26,038	2.2
D	6	283,850	263,893	19.7	7	275,885	312,379	26.7
E	3	148,500	234,490	17.6	3	87,000	124,680	10.6
F	1	320	576	0.04	1	250	495	0.04
計	44	1,109,190	1,334,787	100	37	789,935	1,170,924	100

資料來源：江西年鑑、第2章農産、P．644～648より作成

三、省内の流通事情

江西米穀の流通は、一九三〇年代末頃から敷設を始めた江西省の主要幹線である南尋、株萍、浙贛線が輸送を始めた一九一〇年代初期以後も天然河川に依存していた[17]。民国四年二月に涂家埠・九江間の、民国五年六月には南昌、九江間の鉄道が建設されたが[18]、運送費が高く、遠隔地からの貨物は直接輸出港まで運送するのが便利であったので、依然水運の比重が高かった。ただ米穀の輸出中心港が、本来の湖口港から九江港に移動した[19]。このような水運の偏重は、流通に必要な迅速性、正確性が欠如しており、各地域間の米価の格段の差を出現させた。

江西の地勢は南高北低なので、河流の流れはすべてが北流である。従って、米の集散ルートも水流によって形成され、図五のように上流から下流へ輸送される一つの搬路しかなかった。これは水運の運賃とも密接な関係があると思う。当時上行と下行の水運の運賃を比較して見ると表七のようになる。

表七に見えるように、上行と下行の運賃の差は大変大きかった。さらに、上行の運賃価格は、国民党政府が共産党軍を殲滅するにあたって、民船を傭って軍米を請負運搬するために、南昌航業公会を召集して運賃規定を論議して決定した価格であるので、一般運賃より安かったといわれるから、一般人が往来する際の運賃はさらに高かったことが知られる。

また水路里数も上行の場合は政府が設立した運輸処までの距離であったから、米穀市場間の距離によって決定された下行距離より短かかったから、その運賃は非常に高かったことになる。

一方、水路は降雨量によってその航行距離と日数・運賃と航行の可否が決定されたので、それが各地域の米価に及ぼした影響は大きかった。当時降雨量が米の交易に及ぼした影響は次のように述べている。

如果是在水災的情況下・上航非常危險而且吃力費時、如果是早災的話、則往往由於水位的限制、船隻不能由不游駛往上游地区[22]。

このような時、A区とB区、C区の米穀剰餘地域は上流の米不足地域に、米の移出ができなかったので、米市場の交易はこのように停滞し、農村市場経済に大きなマイナス影響を及ぼした。特に、江西省は表十二のようにほとんど毎年水災、早災があったので、上流地域の米不足地方による民食問題は大きな社会問題となったのである。

また、水深が浅い時、撫河地域の各地から南昌へ行く場合は、鄱陽湖を経由しなければならなかった[23]。この様に迂廻する

表７．南昌とその各関係市場間の水上運輸の上・下行運賃比較表

上行			下行					
縣名	里数	米１石の運賃	縣名	里数	所要日数	米1石の運賃(元)		
						最高	普通	最低
吉水	390	0.468　元	吉水	430	7	0.36	0.30	0.26
吉安	420	0.504　元	吉安	450	7	0.40	0.35	0.30
泰和	510	0.612　元	泰和	540	9	0.50	0.46	0.42

資料來源：江西米穀運銷調査、同前、Ｐ．138、142より作成。

表８　水の少ない時と普通時の南昌とその各関係市場間の水上運輸の里程と日数の比較表

市場名	普通の時		水の少ない時	
	里程	日数	里程	日数
李家渡	140	2.5	210	3.5
臨川縣	240	4	310	5
上頓渡	250	4	350	5
滸湾鎮	280	5	350	6
南城縣	380	6	450	7
崇仁縣	350	6	420	7

資料來源：江西米穀運輸調査、同前、ｐｐ．141～143より作成。

表９　区間別買入賣出時の毎石当りの米價変化

種類	区間	里程	買入時米價 a	買出時米價 b	運賃と雑費 b－a＝c	時期
晩米	南昌→九江	240	6.273元	7.595元	1.358元	1935. 10. 1
早籾	李家渡→南昌	140	4.460元	4.945元	0.485元	1935. 3. 1
早籾	吉安→南昌	450	4.460元	6.300元	1.694元	1935. 3. 1
早籾	贛縣→南昌	900	3.536元	4.454元	0.918元	1935. 3. 1

資料来源：江西米穀運銷調査、同前、ＰＰ．302～303、308～309より作成

表10　江西都市人口毎年米穀總消費量推定額表

名　　目		1924年以前	1928年	1933～35年
a	總人口に対する都市人口の比率	3.78%	4.13%	4.4%
b	都　市　人　口	924,845	839,333	833,360
c	都市人口平均毎人毎日消費量	1.83斤	1.83斤	1.83斤
d	全体都市人口毎年米消費量斤	61,772萬斤	56,064萬斤	55,663萬斤
e	全体都市人口毎年米消費量石	617.72萬石	560.64萬石	556.63萬石

〈資料來源及び説明〉　100%－95.6%＝4.4%

a．1933～35都市平均人口：總人口18,940,000－農村人口18,107,705＝832,295　（都市人口）

民国23年申報年鑑 PP.B.34～39。民国24年中国経済年鑑続編 P．B．5

b．

年別	1924年以前		1928		1933～35		1933年を基準とする都市人口の増減率	
都市名＼人口	總人口	都市人口	總人口	都市人口	總人口	都市人口	1924年以前	1928年
南昌	622,569	350,000	434,879	234,160	405,833	274,203	－22%	＋17%
九江	405,147	53,400	245,147	80,840	259,749	77,262	＋45%	－4%
景德鎮	409,523	200,000	227,595	153,746	262,286	125,000	－37%	－19%
平均	479,080	201,133	302,540	156,249	309,289	158,821	－14%	－6%

1919年人口（民国25年　中国経済年鑑１冊 P．C．23）：24,466,800×3.78＝P24,845

1928年人口（民国23年　申報年鑑　P．B．84）：20,322,837×4.13＝839,333

1933年人口（民国23年　申報年鑑　P．B．34～39）：18,940,000×4.4＝833,360

c．毎人毎日消費量：1.033公斤＝約1.8市斤穀

Buck, Land Utilization in China, statistics, 1929～1933,(1937),P.P.110,473.

d．b×c×365＝d

e．１担＝約100斤

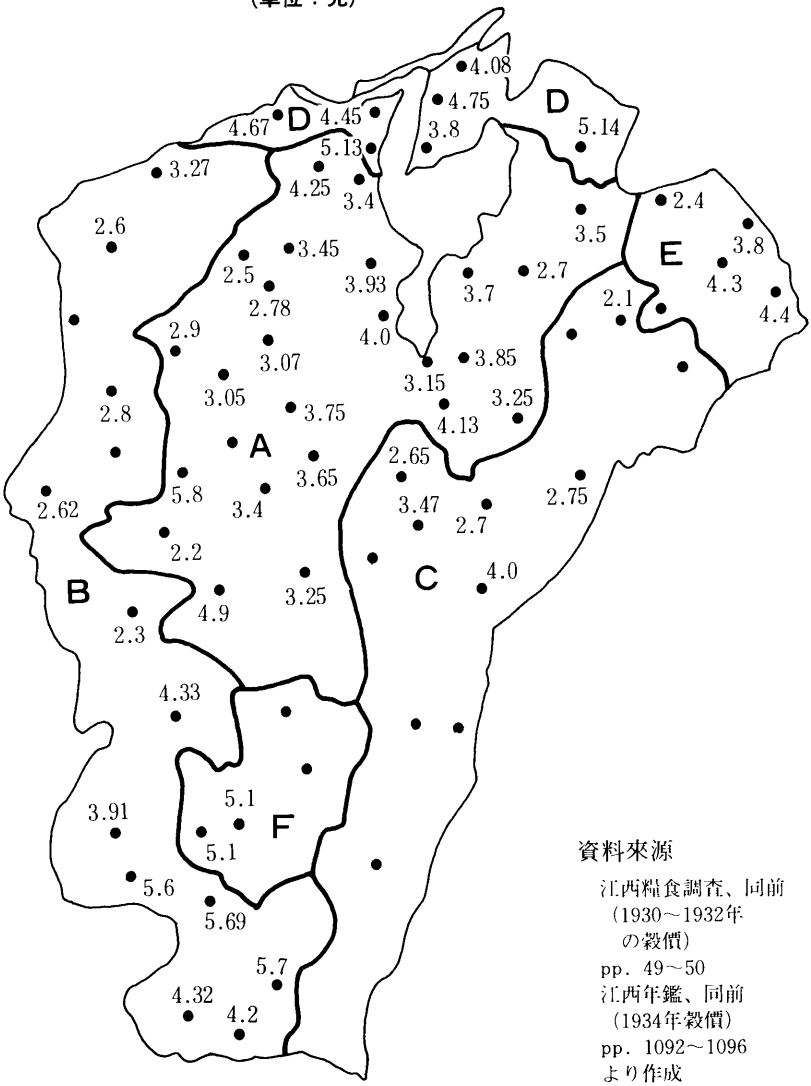
江西省主要都市の毎市方里人口密度

都市名	南昌	廣昌	南庚	清江	臨川	寧都	修水	永豊	湖口	東鄉	九江
毎市方里都市人口密度	64	62	58	54	53	53	46	45	44	43	41

民国25年　申報年鑑 P．B．P 2

図7　1930年～1934年
江西省各縣毎石平均穀價

（単位：元）



資料來源

江西糧食調査、同前（1930～1932年の穀價）pp. 49～50

江西年鑑、同前（1934年穀價）pp. 1092～1096

より作成

里程は稍々遠くなり、日数も多くかかった。これを通常時の各地から南昌までの里程と比較して見ると表八のようになる。又このような距離と時間の延長により、それだけ運賃が高くなったことが理解できる。（参考…表九）

以上のように江西の米価は地域によってその差は大きくなっている。各地域の米価の差は図七によく現れている。このような地域による米価の差は、地域別生産量と消費量との関係、交通、人口等、様々な要素によって起こる現象であるが、江西省ではなによりも当時の米穀需給の責任者である軍政階層が商人階層と結託して操作をおこなったことも重要な原因の一つであった。[24]

各地域の米価を分析して見ると、A区の北部、D区、E区、F区とB区の南部等の米価が高く、A区の中南部とB区の北部と中部、C区が低かった。これも水運と関係があったと思われる。即ち、A区の北部とD区、F区は米穀の移入地域であり、遠隔地から移入されるため表九のように米価が高くなった。従って下流の米穀の集散地域は米価が常に高かった。また、このような集散地域は大抵大市場或いは都市地域であるから、米の消費地域として必然的に米価が高かったことが理解できよう。

当時の都市地域での米消費量を見ると、米穀流通の流れと米価が形成される状況をわかると思う。表十を見ると江西省都市人口の毎年最低食糧必要量は約五五〇萬担から六二〇萬担にもなった。その量は江西米穀總生産額の四・九％から五・六％であり、これは毎年剰餘量七百萬担から八百萬担と比較すると、江西主要都市で米流通量の比重が、江西米穀の流通と米価の決定に重大な影響を及ぼしたことがわかる。従って、A区は都市人口密度が高い大部分の都市を含んでいるので、生産が多かったためにF・D・E区ほどは高くなかったとはいえ、全体的には高価格であったと言える。D区・F区は生産が少なく、かつ消費商業都市地域であったので、米価は大変高かった。またA区・D区・F区は河川交通の結節点であったので、比較的容易に米穀を搬入することができたが、運賃等の雑費や流通過程によって米価は上昇した。E区の食米は全面的に輸入に依存しており、かつ前述のように他地域からの流入人口も多かったので、当然のことながら米価は高かった。

これとは対照的にB区の中・北部地域とC区では、移入時には上行、移出時には下行であったので、米の移入が大変困難であった。そのため大抵は自給自足或いは隣近県との物物交換式買賣により、食米問題を解決したので、米の取り引きも少なく、米価も低かった。[25]

このようにA区を中心とする米産区の米穀は、政治的・軍事的目的によるものを除けば上行地域への米移出はほとんどな

表11　1930年代江西省災年及び常年の地方別米價の比較（単位：元）

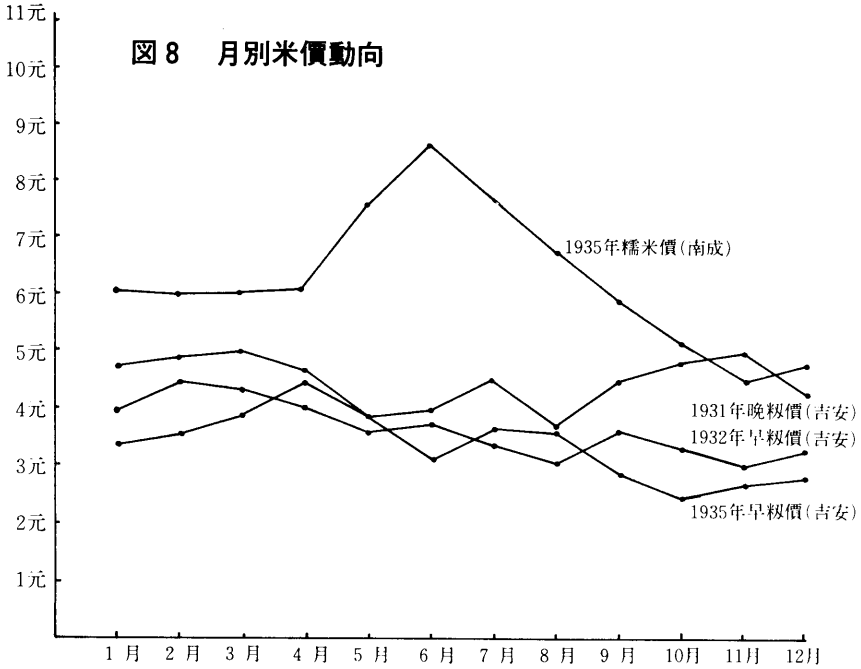
地区	市場名	1931　災年		1932　常年		1933　常年		1934　災年		1935　災年	
		早米	晩米	早米	晩米	早米	晩米	早米	晩米	早米	晩米
A	吉　安	6.95	7.32	6.30	7.00	5.61	6.15	6.43	8.00	7.26	8.98
A	樟　樹			6.86	7.92	5.87	6.31	6.98	8.04		
A	涂家渡			3.42	4.23			3.60	3.89	5.48	5.52
A	臨　川			6.40	6.73			7.10	7.56	8.24	8.84

資料來源：江西米穀運銷調査、同前、ｐｐ．243～274より作成

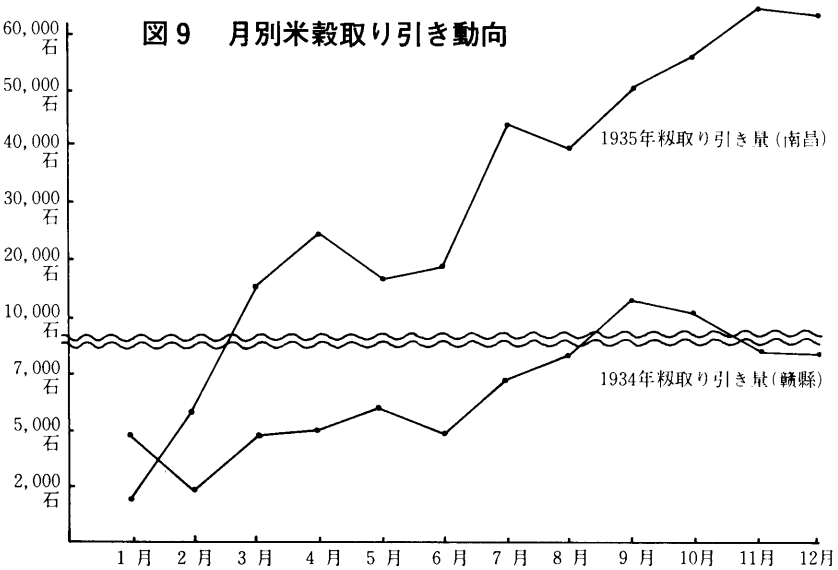
表12　江西省年度別災況表

年別	災　　別	災況	年別	災　　別	災況	年別	災　　別	災況
1888	水、旱	34縣	1902	水、旱、風、虫	22縣	1924	大水	
1891	水、旱、風	21縣	1903	水、旱	17縣	1925	大水	贛州
1893	水、旱	21縣	1905	水、旱	27縣	1928	大水	
1895	水、旱、虫	21縣	1906	水、旱	25縣	1929	虫	
1896	水、旱	17縣	1912	大水		1930	水、旱	
1897	水、旱、虫	27縣	1913	大旱		1931	大水	
1898	水、旱	28縣	1914	大水		1932	水	
1899	水、旱、風、虫	35縣	1915	大水		1934	水、旱	14縣
1900	水、旱、風、虫	31縣	1917	地震		1935	大水	
1901	水、旱	29縣	1918	水				

参考資料：鄭震特、中國救荒史、頁44-48
蘇筠、中国農村復興運動聲中之天災問題、東方雑誌30巻24号
郭庭以、中華民国大事日誌



資料來源：江西米穀運銷調査 同前pp. 61～65より作図



資料來源：江西米穀運銷調査　同前 pp. 220～265より作図

かった。このように米穀の流通は消費地域であるA区・D区・E区・F区が中心になったことがわかる。これは米穀流通の偏よりを意味し、食米不足地域に対する円滑な供給があまり行われなかったことを示す。

ところで、江西省では災害によって米価が大きく変動した。表十一を見ると、災年と常年で、相当の米価格差があったことがわかる。吉安での常年と災年の米価の差を比べ見ると、その差は表十一に見えるように災年の米価が毎一石当たり早米は一・三四元から一・六五元、晩米は一・一七元から二・八三元も高かった。このような状況は資料の関係上、A区以外の地域についてはわからないが、米生産の中心地域であるA区の状況を見ると、米自給自足地域或いは米不足地域での状況は、A区より深刻であったことが容易に想像できるよう。

特に、江西省は長江流域の代表的な災害地域であった。表十二からわかるように、災害は深刻であり、米価がこれによって変動したことを考えると、省政府の救済政策の疎略・流通状況の閉塞等社会経済的問題の深刻性を理解できよう。

しかし、このように災害時と春窮期等の社会的な困難時、より深刻な問題は商人・軍政階層による投機性利益追求方法であった。図八と図九を見ると、米価は季節によって変動したことがわかる。即ち、米価は七月から十月の間では低く、十一月から四月の間では高かった。これは収穫期には価格が下がり、非収穫期には上がるというな問題はその価格差であった。図七からわかるように米価の変動幅は、年間に約四元から六元に至ったが、これは米穀需給政策に大きな問題があったことを示す。また、米穀の取り引き量も春窮期には大きく下がり、米価の上昇を起こす要因になった。

このような季節による米価の変動と災年の取り引き量の減少等の状況を利用した商人・軍政階層の横暴について、当時の人々は次のように述べていた。

糧食行は機会に乗じて軍人と連絡し、秘密に貯蔵して、糧食恐慌の空気を虚構的に作り、市價を操縦する。数年前贛縣の米價の高騰は糧商と軍人が共謀して悪事を働いたのが原因である。[26]

このような季節的要因の外に農民に大きな損害を与えたものは、米穀交易の時に使用された銅元の換率問題であった。表十三で見えるように米価は少しずつ継続して上昇した反面、銅元の価値は継続して下がった。当時商人・軍政階層が銅元を濫発し、社会の金融秩序を混乱させ、自身の利益を追求する一方で、農民及び一般都市民ははるかに価値の落ちる銅元だけで生活しなければならなかった。

九江因奸商濫発当十及当日之銅元小票、動輒超其資本以上、以致釀成倒票風潮。自票潮発生後、銅元小票除中国、裕民

表13　南昌市での米價と銅元の換率変動表(1927～1932年)

年　別	米　　價　a		平均銅元百枚換銀元額　b	
	元／石	指数 1920＝100	100文／元	指数 1925＝100
1920	7元 c	1.00		
1925			0.370 d	100
1928			0.3488	94.3
1929	7.8125	112	0.3513	94.9
1930	11.936	171	0.3309	89.4
1931	8.886	130	0.3306	89.4
1932	8.293	118	0.3018	81.6

資料來源：a．第一回江西年鑑、民国25年、pp．644～693。
b．江西経済問題、同前、pp．340～341。
c．穆藕初、「米貴之原因及補救法」東方雑誌、第17巻第15号、pp．116
d．「中国之統計思想」中外経済月刊、第99号、1925年2月10日 pp．9～11

兩銀行及商会所発行者外、其餘雑票一概不能行使于市上。……以目前而論、在表面上票潮雖已息、而暗潮実継増未已、因各大商店如書業、洋貨業及郵局、雑税機関等、仍絶対不收雑票、如雑貨店与其他小貿易營生者、亦挑選甚苛。最可憐者、為四郷挑負材炭、菜蔬上市來賣之樵夫、農民、不收雑票、(則有原物挑轉之危険、收受又不易以之購得所需之物、帶回又怕明日倒損。正如究苦市民以洋鈔購米、所我回者、全為雑票、不受則無米下鍋、感受同様之痛苦。[27]

このため、農民は米穀の都市移入を忌避し、そのために米穀の流通は断切されて、都市民は食米と生必需品の構入に困難を受けた。このように金融秩序の紊乱による経済的逆作用は、都市と農村経済に大きな影響を及ぼした。

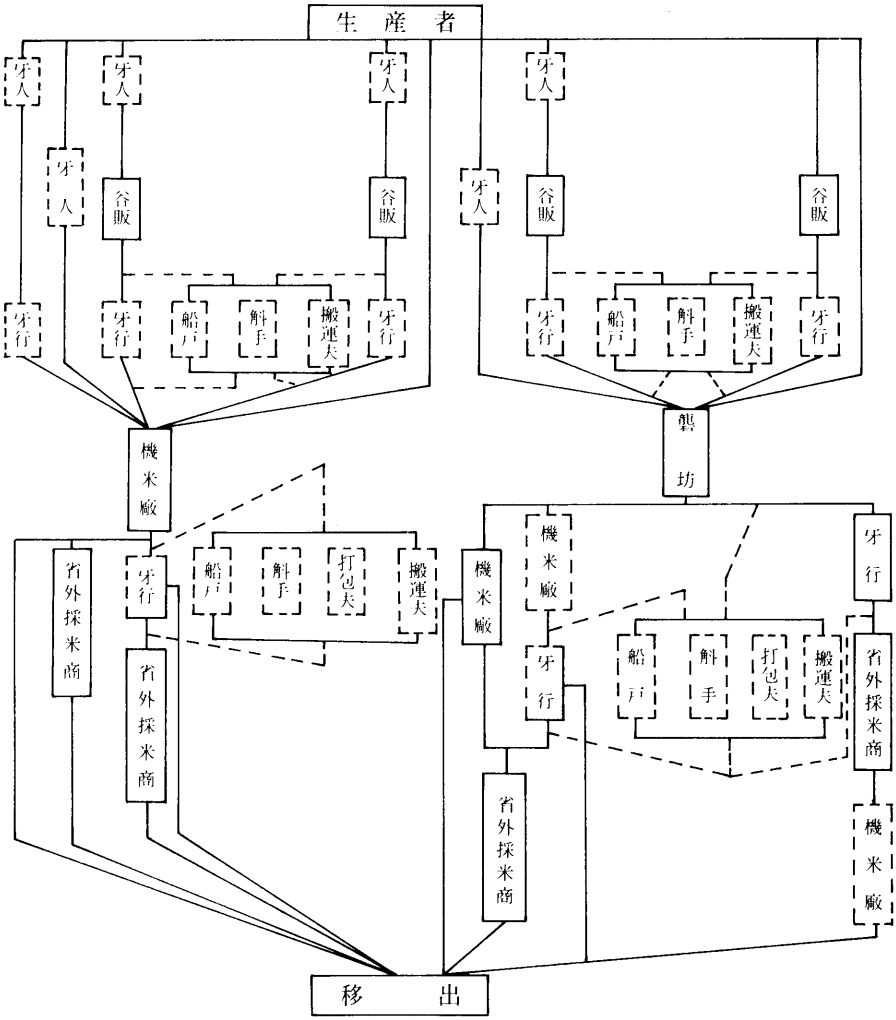
以上で見たように江西省内米穀市場において、地域別需給問題、商人・軍政階層の利益独占問題、金融秩序の破壊問題、災年と春窮期の民食問題等は、農民に反時代的反政治的感情を生ぜしめるに十分であったと考えられる。これは軍閥割拠、国共内戦等国内状況と列強資本主義の侵入という対外的状況が、どのようなかたちであれ、変革を迫られていたことを意味しよう。

四．省外との流通

まだ資本主義商品経済段階には至らなかった当時の中国農村において、米穀の賣出の依存度は、特に長江流域の米生産地域で大変大きかった。[28]

このような米穀の賣出は当時の江西人口の七十％に該当する一般農民にとって最大の収入源であった。ところが省当局と軍閥・商人階層にとっても最大の収入源であった。[29] そこで、商人は農民と軍政階層の間に立ち、農民を欺瞞して大量の米穀を安く買入れ、軍政階層と結託して外省へ移出した。米穀が農民から他省へ移出するまでの過程を図十に示す。この図から、農民から省外に移出されるまでの中間段階が非常に複雑であったことがわかる。この移出過程で、商人階層である計量師・

図10　江西省における米穀移出過程



資料來源：江西省農業院農業経済科編、江西米穀運銷調査
支那経済史料８　生活社　p．46

図例　賣買に参加しないもの
仲介人の性質を有しながら賣買に参加するもの
賣買に参加するもの

小商人・仲間問屋・米戸・米商等は手数料・茶水費・米価の操作・不正の度量衡器の使用・買入時の支払金の延滞等手段を利用して利益を得た。

例えば、計量士の場合を見てみよう。計量費は規定によれば多くはなく、各地は大体毎石一分であるが、実際には計量師は各種の技術を持ち、一百石の穀物を計算により一、二石多くすることも又は逆に一、二石少なくすることも出来た。故に賣買双方は正常の計量費の外に若干の金を計量師に支払わねばならないのである。[30] 手数料の場合、正常の手数料は各地で普通二乃至三％であるが、実際は八乃至九％であるとされた。吉安等の大市場の仲買問屋の場合、毎月多い時には五百乃至六百元、少ない時でも二百乃至三百元であった。[31]

また中間で問屋等にピンハネされており、かかる小商人は、常に極力農民を欺罔し、利潤を獲得せんことを図っていた。かれらは任意に価格を低落せしめ、或は色をなして缺点をあさり、或は不正の度量衡器を使用し、一部分に対してのみ現金を支払い大部分を借りにしておくのは日常に見られることであった。[32]

仲間問屋は農民が米移出時必ず経由すべき位置を利用し、「八掛拂ひ」又は「整数九九交現」（百元の価格のものは現金九九元のみを交付し、一元を割引にする、然からずんば支払を延期し何回かに分けて支払をする）という悪習を施行し、小売人に対する船上開艙費用は資本雄厚なる問屋により操縦された。このような問屋手数料の外にも、問屋内の店員に贈寺所謂「茶水費」の如きは極めて普通のことであった。[33]

さらに、大きな資本を持っていた米商と米戸は内地米市及び輸出地域の米市も掌握し、米穀流通の大部分の利潤を吸収した。[34]

このように農民から集積した米穀は、もっと大量の利益を取るため、これら商人階層は軍政当局と結託して米穀の省外移出を企図した。このような移出の規模は、当時海関の統計によって概容を知ることができる。しかし、当時の江西省の剰餘量と輸出能力の水準から見れば、海関統計数をうわまっていたと思われる。当時の海関統計に対して中国実業誌は下のように記述している。

民国二十年以前、海関数字・実足以代表其（穀米）貿易之大部。[35]

しかし、当時の江西米の輸出経路を見ると、海関を通じる公式ルートと、私運による非公式ルートがあった。海関の移出は九江海関が鉄路建設以後は約6／10を、湖口が2／10、その他の海関が2／10であった。[36] このうちその他の海関は統計が全

くなかった。[37] 私運は東北境から安徽省南部へ、東境から浙江省の西部へ、東南境から福建へ、南境から広東へ、西中境から湖南へのルートがあったが、これらの経路を通じて移出した米穀も全然把握されなかった。[38]

一方、公式ルートを通じる移出時にも、船の種類によって計上されなかった米穀も多かった。当時上海へ輸出時の船は大船を使用したから、必ず海関を通過したが、漢口への移出は民船を利用したから、海関を通過する必要はなかった。[39]

一九三一年に九江海関を通じて移出された米穀の数量を見ると、海関に報告した汽船による輸出は二〇九、九四〇包（三一四、九一〇担）であったが、未報告の帆船による私運の輸出米穀は、三一〇、〇〇〇包であったと推定する記録がある。[40] また一九一四年に民船による蕪湖への移出が五十萬石にもなった記録もあり、[41] 当時海関の統計が移出量の一部に過ぎなかったことがわかる。

特に、米禁期間中「護照」による私運・即ち軍米・漕米・販米等の運送は海関にほとんど報告されなかったといわれる。

現時米禁未開・毎有假借軍夫名義・私運出境者・既碍捐収、又影郷民食。[42]

一九〇四年から一九三三年までの三十年間の海関経由移出米の統計を見ると、さらに詳しくその状況を知ることができる。（参考…表十四）

一九一五年以前には十万石以上の輸出はなかったが、一九一五年以後には一九二六年の六萬石以外には毎年平均八十二萬石以上の輸出があったことがわかる。特に、一九一九・一九二三・一九二八・一九二九年には百萬石から百五十萬石が、一九二〇・一九二四には二百十萬石から二百五十萬石が輸出された。また当時の専門米穀輸出商人の推定によると、毎年輸出額は少なくても百五十萬石以上であったといわれる。[43] このような記録と当時の江西省の米穀輸出能力が二百四十萬石であったという記録、[44] 二百七

表14　1904から1933年までの江西食米輸出数量表

年　別	数　量（石）	年　別	数　量（石）	年　別	数　量（石）
1904	20,334	1914		1924	2,447,831
1905	74,764	1915	59,890	1925	680,936
1906	30,436	1916	366,497	1926	67,154
1907	73,949	1917	630,516	1927	394,816
1908	1,390	1918	463,862	1928	1,396,899
1909	13,450	1919	1,423,461	1929	1,099,290
1910	68,121	1920	2,101,898	1930	344,846
1911		1921	162,929	1931	297,976
1912	27,130	1922	263,916	1932	128,526
1913		1923	1,247,931	1933	530,941

資料來源：社会経済調査所編、江西糧食調査、支那経済資料７、生活社刊、東京、昭和15年６月　Ｐ．29

十萬石であったという記録[45]、そして表二で見たように剰餘額が約三百五十七萬石であった事実を合わせて考え見ると、いくつの年を除けば海関を通じて公式的に輸出された米穀より、民般による私運輸出の方が多かったことがわかる。特に、清末民初の政治社会的不安時期や一九二一・一九二二年軍閥戦争の激動期・一九二六・一九二七年中共の跋扈期・一九三〇・一九三一年大水災期等災難期において公式輸出量が極めて少なかった事実は、このような社会的狀況を利用した商人・軍政階層の密輸出が多かったことを代辯していると考えられる。次の記録は当時のこのような狀況をよく表現している。

秋収後、輸出販米・軍米及商人買屬米禁各局卡、或由軍隊包庇私運出口之穀米、亦無慮数百萬石……。[47]

当時、江西省でこのような密輸出的性格を持つ私運の盛行は、当時の米穀輸送の主な手段であった民船の数とも深い関係がある。まず当時江西省の水上公安局が、旗照税を徴収した民船の隻数を見ると表十五のようである。当時民船に対する検査は、水上公安局と稽徴所が毎年実施し、検査後旗照を発給し、旗照税は船の容量に従って課せられた[48]。

一九三四年の總登録船は二四、九三五隻であり、その中容量三百石以下の小船が一六、七九二隻であり、六十七％を占めた。これらの小船は、検査所が十六處に設置されていたにもかかわらず、非常にその輸送能力が流動的であったから、私運は容易であった[49]。これら小船の一日運行可能時間は十時間であり、種類は百餘種に至った[50]。その中で百石から二百石容量の小船が一番多く使用されたが、それは水位が低かった秋冬期にも運行が可能したことからである[51]。特にこれら小船は、各地へ随時に自由に運行できたので、各地の米價の変動狀況を把握することができたので、商人は大船よりもむしろこれをよく利用した[52]。

一方、軍閥割據時期には南北軍閥が長江流域に雲集し、自身の保護及び利益確保のため、貿易を妨害したから長距里航海時の安全性が問題になり、また運送費も高くなった。そのため買入價より輸出價が安くなったので、長距里貿易は忌避され、短距里貿易が活発になって小船の移用はさらに増加した。（参考・表十六）短距里貿易が活発になったことは、当時江西の米穀が漢口・無湖等附近の食米に大きな影響を与えたことからも知られる[54]。

由於湘贛米供應短缺、漢口及其附近地区的米價上漲到十五元或三萬文一擔、已経接近飢荒的警報数字了[55]。

さらに当時江西省では貨幣が濫発され、種類も多かった。貨幣の中心は銭票であったが、実質的價値は全くなかった。当時江西省の貨幣の実質價値は約67％に過ぎなかった[56]。江西商人は実質的價値があった湖北・安徽・浙江等省の現金を必要とした[57]。そこで、湖北・安徽・浙江等近隣地域に対する米輸出が活発になった。小船の私貿易は急増し、その活動は秋冬期は

表15　1934年度江西水上公安局の旗照税を徴収する民船隻数

等級	区別	容量（據）	毎隻徴収（元）				隻数
			税額	旗費	註冊費	合計	
特等		1,800以上	12.00	0.30	0.1	12.40	62
頭等	上	1,501～1,800	10.00	0.30	0.1	10.40	58
	下	1,301～1,500	9.00	0.30	0.1	9.40	78
二等	上	1,101～1,300	8.00	0.30	0.1	8.40	14
	下	901～1,100	7.00	0.30	0.1	7.40	134
三等	上	801～900	6.00	0.30	0.1	6.40	332
	下	701～800	5.00	0.30	0.1	5.40	208
四等	上	601～700	4.00	0.30	0.1	4.40	323
	下	501～600	3.00	0.30	0.1	3.40	533
五等	上	401～500	2.50	0.30	0.1	2.90	921
	下	301～400	2.00	0.30	0.1	2.40	1,889
六等	上	201～300	1.50	0.30	0.1	1.90	3,541
	下	101～200	1.00	0.30	0.1	1.90	8,084
不列等		100以下	0.50	0.30	0.1	0.90	8,708

資料來源：江西米穀運銷調査、同前、ｐｐ．132～133

表16　各地域の米が上海に運送する時までの費用（1932年10月１日）

貿易港	当地米價元	販運費元								販運費包含の実質米價	上海米價	利損差額
		運賃	包装費	佣金	税捐	匯水	保險	雑費	共計			
長沙	6.825	0.97	0.48	0.38	1.803	0.30	0.037	0.1	4.070	10.865	8.250	−2.645
九江	6.180	0.691	0.43	0.39	1.10	0.20	0.037	0.1	2.948	9.128	8.250	−0.878
蕪湖	6.120	0.45	0.48	0.26	1.053	0.20	0.035	0.18	2.658	8.778	8.000	−0.778

資料來源：巫宝三、中国糧食対外貿易其地位趨勢及変遷之原因、1934　Ｐ．33

勿論、春夏期に継続した。当時小船の私貿易活動を見ると左のようである。

……不領運單・無形漏扈・爲数甚巨・爲官民所不及覺。民船裝運・瀕河地方彰明較者・源源不絶・毎月二三十萬石……。[58]

以上のような商人、軍政階層の密貿易及び私運は、江西農民の生産物を収奪し、自分の利益だけを追求したことを示す。特に、仲介及び買入過程での商人階層が軍政階層と結託して外省への密移出及び私運を画策したことは、省財政と経済に大きなマイナス影響を及ぼした。そして米穀の賣出によって生活すべきの農民に、米穀の賣出を拒否させ生産意欲を低下させ、農村市場経済の活性化を妨害した。

五、米禁の影響

江西農村に影響を与えた大きな要素として、米禁の口実の下に、米の流通を阻んた商人と軍閥階層の弊害があった。

元來米禁は省内に米穀の生産が少なくなって米価が上昇したり、災難等のため民食に影響がある時に実施された。米禁の形態には二つの種類があった。一つは封関であり、もう一つは阻禁であった。封関とは政府が決定し、米穀の省外への出境を禁止することであり、阻禁とは地方の正式・非公式団体が、その影響力を通じて他地方に米穀の運出を阻止することである。[59]

しかし、このような封関、阻禁の問題は、本来の目的の外に、商人、軍政階層等が自身の利益のために実施した点にある。特に阻禁は封関と連動して行われたので、相乗作用がもたらした影響は、農村農民にとって非常に大きかった。

まず、民国以後江西省に於ける米禁実施状況を見ると表十七のようになる。表十七の来源は一つではなく、いろいろの資料からまとめて作ったものであるから、確実な状況を見ることはできないが、当時の米禁状況がある程度わかると思う。この表によると米禁期間は一九一五年と一九二七年が一年以上であり、一九三一年ははっきりわからず、一九二一、一九二二、一九二五、一九三四年等は半年ぐらい実施されたことがわかる。

この期間中半分は大水災があり、半分はなかった。これは即ち当時江西省の米禁が災荒とはそれ程関係がなかったことを示す。

また、米禁時省内で民食問題があったとは限らない。なぜなら封禁期間が一年間ずっと継続された年は少なく、継続された年も米穀の輸出は、少くとも公式的には行なわれていた。（参考：表十四）そして、もう一つの海関である湖口では米禁

表17　民国以来九江での禁米出口表

註	年　別	海　関	米禁有効期間	d．原因
a	1915	九　江	禁米出口已有年餘至1916年1月始弛禁	大　　水
a	1921	九　江	5月	
a	1922	九　江	準出口1100萬石	
a	1925	九　江	6月15日	大　　水
a	1927	九　江	続上年	
b	1931	九　江		大　　水
c	1934	九　江	下半期	水旱縣14

資料来源：a．巫宝三「中国糧食対外貿易」、登雲特、中国救荒史、民国26年、pp．34～35
b．大公報、1931年8月21日～8月24日
c．江西糧食調査、同前、P．91
d．東方雑誌、第30巻24号、1933年
e．郭庭以、中華民国大事日誌

が全く実施されなかった。

一方、一九二二年の米禁政策内容を見ると、当時九江海関を通じて移出された米穀は二六三、九一六石ですぎなかったが、当局から許可された輸出限度額は百万石であった。このことは海関統計が全体輸出量の統計を意味していないことを考えると、江西省で実施した米禁が、省内の食米不足を防止するために実施されたわけではないことを示す。

このような米禁が江西省で必要した理由は何であったか。それは当時米禁が実施された時期を見るとわかると思う。表十七によれば確実ではないが、概して民国の共和政建立時期より、一九二〇年代閥乱立期に多かったことがわかる。即ち、軍閥政権は戦争費用と政権維持のために米禁を必要としたのであろう。[61] また、商人階層はこの機会に乗じて大量の利益をもくろんで、軍政階層と結託してからの手先になった。[62]

商人は巨額の資本を持ち、収穫期と春窮期の時期を利用し、米価の操縦、囤積等によって利益を追求した。軍閥は商人が米穀を移出する時、「税捐照費」等を受け取って収益を上げた。

江西の米穀の収穫期間は大抵早稲の場合六月末から七月初まで、晩稲の場合は九月末から十月初までであった。小作農（当時、全農民の五十一％から七十六％を占めた。）[64] で納めるため、この時期米穀の出荷が多くなった。このような多量の出荷は流通構造上の問題や商人の細工のため、米価の暴落をもたらした。しかし、農民は契約期間内に納租する必要があったので、米穀を商人階層に売らなければならなかった。故に、この時農民の苦しみは大変大きかった。

去年秋季（一九三二）各地穀價、毎據約在二元以下、交通不便之處、

且在二元以下。穀價慘跌之秋、農民因為償還耕牛、種子、典質、販貸各種積欠、及田賦、捐税、交相煎迫之故、雖吃虧不得不賤價出售、〃放下禾鎌没飯吃〃、或爲農村之並遍現象。米穀所以跌至如此程度、並非生産過剰、……。[65]

一九二〇年代の平均米價、約七元前後と一九三一年吉安の年平均早穀價三・六六元、晩穀価三・八四元と一九三二年臨川の年平均早晩穀價三・一一元と三・二九元を比べ見ると、[66] 収穫のため投資した耕農資本にも及ばない額であることがわかる。[67]

一九三二年秋季の農民の生産費と所得を見ると次のようである。

米價一天跌落一元。米價驟跌一元、不到一月、價跌竟達二元有餘。計自糙米八元五角、跌至五元至六元。農民雖稱農収、但每畝収穫、亦不過一石六七斗。全数糶去、以六元計算、祇得九元稍零。佃農連還租在内、以及工資等項、每畝須木洋十二元、則種租田一畝、虧本幾達二元之多……。[68]

このように一畝につき二元以上の損害を受けながらも出荷しなければならなかったので、米穀の流通量は非常に増え、米価は暴落した。この時、商人は大量の米を購入して省外に輸出し、大きな利益を得ようとした。軍政当局もこの移出機会を利用し、収入の増加を企図した。

当時軍閥当局の主収入源は米禁時に取り立てた「税捐照費」であった。即ち、米穀の省外移出時、籌荒、防荒の口実の下、米穀の制限的移出のための輸出証明書である「護照」を発行し、[69] その発行費と其の他雑税を取り立てた。

当時の輸出米一石に対する捐税及び運輸費は下のようである。

在江西護照費爲一元、水脚每百斤四銭、每包約八角五分、麻袋四角、出口関税三角三分、升合三角、上海行俵火險雑費二角、江西行俵二角、水險駁費報関費二角、計洋三元七角。[70]

このような雑捐中でも、護照費の比率が一番高かったことを分かる。一九二〇年代一九三〇年代の江西省の毎石平均米価七元前後の水準と比較すると、[71] 一石あたりの護照費一元は、大変高く、軍閥当局の主要収入源であったことがわかる。従って、この護照費は米禁が解除され後にも継続徴収された。

目下蘇、皖、贛、湘各省、已無米禁之今、似可謂自由流通矣。其実不然、産米各省、至今仍有護照費、登記費等種種各目、未領照者、仍不能出口。[72]

これは護照費の収入が多かったことを示す。このように商人、軍政階層は自分の利益のため、農民の生活及び民食問題等には関係なく、米の流出政策を推進した。

三月、四月の春窮期に至ると、省内の米消費の増加、米の大量移出、商人の囤積等により、全省的に食米不足現象が起こった。この時、もう一つの問題は洋米の衝撃であった。

洋米洋麥充斥中国市場之成為豊収成災底原因、乃是帝国主義者把他自己及其殖民地上生産過剰的農産物到中国來実施其傾銷政策的結果。……例如江西的米穀素來以上海漢口為他底銷納場所、但是這兩個市場都已有洋米洋麥在傾銷、所以江西南昌的米、因為不容易運出、價格也就低落。[73]

このような洋米の流入は、江西米穀市場価格を低下させ、江西米の移出を困難にし、米禁の必要性を消滅させた。この時、省当局は米移出の解禁を実施したが、その時にはもう剰餘力がなくなり、商人にとっても省外への輸出より、省内での売買の利益の方が多かったので、実際には解禁は無意味であったが、依然として輸出時に「護照黄」が適用されていた。[74]

しかし、もっとも大きな問題は、この廉価の洋米を輸入したことである。即ち、一九二八年からはじまった江西の米輸入は、少なくとも毎年継続された。このような米の輸入は、省内の民食不足を解決するために実施されたと理解することもできる。しかし本来米穀の生産として有名な省が外米を輸入するのは、農業経済の崩潰の一斑を語るものと考えられる。[76]特に、この外米の輸入が商人と軍政階層の利益のために行われたとすれば、これは大きな問題であろう。例えば、一九三〇年度外米の輸入量は一六一、五一八石であった。[77]当時江西省では大災害もなく、共産党の動きも平年と似た状況で、一九〇四年から一九三三年までの三十年間平均輸出額四八〇、六五六石と比較する時、この輸入量は大変多かった。商人、軍政階層が自分の収入のために敢えて輸入したことを意味しよう。

このような影響は、米の商品化状況を萎縮させ、農民の耕作意欲と生産性を低下させた。これは耕作面積の縮小、荒地の増加、外米の輸入等農民の生活経済を麻痺させ、農村市場経済の破綻をもたらしたので、江西農村での民主資本主義的社会経済活動を阻害することになった。

このような問題に対し、当時の調査者は、「作一週詳之調査、改善交通、取消省内流通時厘金的負擔。[79]」といった解決策を提起したが、生産から省内流通、省外移出までの全過程で派生される根本的問題は解決できなかったようである。

従って、当時一番重要であったことは、政治的安定による計画的な農村政策の実施であったと思う。即ち、それは当時、農村と農民の現象を直視し、その矛盾点を発見することであった。このような面で、国民党系の省政策は中共の政策に及ばなかったと思う。

六、結　論

中国は二十世紀初期、政治的激変による社会的、経済的混乱が激化し、帝国主義列強の侵入が加わったので、民主共和制の出発がはじめから脅威を受けた。これら変革の主体は被支配階層ではなく、支配階層に属した軍閥、革命份子、地主商人等郷紳階層、そしてかれらと結託した帝国主義者であった。

このような状況の下で、被害を受ける階層は当然全人口の八十％以上を占めた農民階層であった。歴史的にもいつも利用されたかれらは、比較的近代的文明に接した二十世紀初期も例外ではなかった。故に、かれらに新たな形態のビジョンを見せた時、かれらの関心を引くことは、それほど難かしいことではなかった。

この点で、国共両党の視角は大きな差があった。既ち、それは既存の勢力図の中で問題点を改善しようとする視角と、新たな勢力圏を形成し、拡大しようとする過程で問題点を発見し、改革を推進しようとする視角の差であった。故に、両党の政策路線とその実践方法も全然違った。例えば、中共の場合は農民の支援を得るために、当時の農民の要求に符應する政策を実施した。

在一個圍内（一個区、郷農協的範圍）須先有一個大概的調査、當地食穀若干、既於租穀中分別派留多少、以備平民購食之用、餘谷一概任其流通、不限價格。[80]

これに対して、国民政府は中共の勢力拡大を阻止するため、政策を実施した。このため農民たちに与えた被害は非常に大きかった。

近年江西地方之辦兵差修公路、若無所出、各縣均自由按丁漕增加附加税百分之八十者、而今意已多至百分之百以上。[81]

このような両党の視角差に対する農民の判断は当然の帰結であろう。しかし、このような結果は、今までの中国の発展進行状況から見ると、非常に否定的面が多すぎであろう。

本文ではこのような観点に立って、米穀の全般的状況を通じ、当時の中国農村に現われた問題の把握とその解決点の性格を究明しようとした。即ち、本文で指摘した農業政策の不在・階層間の経済的不信感・交通の未発達・流通構造の矛盾、政治的対立等の諸般問題に対して、当時国共両党が実施した政策は、これらを解決することが可能であったか、かれらはこの観点より農村問題を取り扱おうとしたかを考える時、かれら両党の政策には限界点があったと思う。

故に、米穀が生産者から消費者までの適切な伝達、地域間生産量格差の需給調節、生産の過剰あるいは不足時の移出と移入の平衡等は、当時の両党の政策では解決できない問題であった。即ち、政治的勢力の確保と挽回のための政策は、当時の根本的な農村農民問題を解決するためというよりは、戦術的勝利がもっと強いのである。例えば、国民党政府の市場経済政策、農業改進政策、貿易政策、外交政策等と共産党の階級闘争、土地政策、社会主義的分配政策は、目前の要求だけに対處しようとした短期間的、短視角的政策であった。

当時中国社会が必要としていた政策は、最近の国際社会の流れのように、相互牽制と均衡を基礎とする自由競争市場経済の流通構造の下での均等分配政策であった。

しかし、国民政府にはこのような意識はなく、中共の成長に対する対處だけに窮々とし、むしろ中共の戦略的拡充の機会を与えたので、結果的に時代錯誤を犯して、中国の発展を遅延させた。

註　釋

(1) 民意、「中国米的生産及消費(一)」、建設、第一巻第二号、一九三〇・八～三九三一・一、商務印書館香港分館海外発行、一九八〇年影印本、頁・三～四。

(2) 江西省政府統計室編輯、第一回江西年鑑、江西、民国二十五年十月初版、頁・六四四～六九三。

(3) 各省の土地に対する稲田の比率：
浙江：40・4％、湖南：30％、安徽：30％
四川：25・3％、湖北：25％、江蘇：17・4％
江西：15％
参考(註(1))

(4) 各省の米穀生産量
湖南：四四、一三六、九六四石　浙江：二五、九五一、五〇〇石
江西：三七、四四四、八三六石　湖北：二一、二八六、二五〇石
安徽：三三、六六四、五〇〇石　江蘇：二〇、五九六、三七四石
四川：三三、二五一、六六二石
左律、「中国田賦問題」、中央日報、民国二十年一月二十七日

(5) 社会経済調査所編、江西糧食調査、支那経済資料七、東京、生活社刊、昭和十五年八月、頁・一～二
(6) 同註、(5)頁・二
(7) Ho.P.T.「studies on the Population of china」孫敬之　華中地区経済地理、一九五八、頁・七六。
(8) 同前、(5)、頁・二六
(9) 同前、(5)、頁・二四～二五
(10) このような各々の原因に対する理解は、下の論文を参考にすること。
呂芳上、「戦前江西的農業改良与農村改進事業（一九三三～一九三七）」、台北、中央研究院近代史研究所、近代中国農村経済史研討会論文、一九八九年八月　頁・三～六
(11) 東亜同文会調査編纂部、民国十五年中国年鑑、台北、天一出版社、民国十五年初版、民国六十四年影印版、頁・一〇五六
(12) 「蔣委員長告民衆書」、中央日報、民国二十三年三月十日。
(13) 参考：
江西省政府経済委員会、江西経済問題、中国史学叢書続編、台湾、学生書局、民国六十年六月初版、頁・一三五～一四二。
同註(2)、頁・六四〇～六四四。
同註(5)、頁・一～十九。
(14) 東亜同文会編、支那省別全誌、第十一巻、江西省、東京、頁・五〇七～五三二。
(15) 馮柳堂、「早災与民食問題」、東方雑誌、第三十一巻第一八号、頁・二〇、参考、表三と表四。
(16) 同註(10)、頁・六～七。
(17) 同前、頁、四～五。
(18) 江西省農業院農業経済科編、江西米穀運銷調査、支那経済資料8、東京、生活社刊、昭和十五年八月、頁・一三一・一六九～一七〇
(19) 支那省別全誌、第十一巻、江西省、同註十三)頁・二〇四～二二四
江西省政府経済委員会編、九江経済調査、支那経済資料六、東京、生活社刊、昭和十五年八月、頁・八三～九一
(20) 同註(18)、頁・二〇一、二一七
(21) 同註(5)、頁・一七～二〇
(22) 同註(17)、頁・一三八
(23) Imperial Maritime Customs, Decennial Reports 一九〇二～一九一一　頁・二〇二
(24) 同註(17)、頁・一三七、一四三
金国宝、「洋米征税之先決問題」、銀行週報、第十七巻第四一期、一九三三年十月二十四日、頁・三

(25) 劉大鈞、「我国佃農経済狀況」、馮和法編、中国農村経済資料、下冊、一九三三年。頁・一一一五。
(26) 同註(17)、頁・八一
(27) 章有義、中国近代史農業史資料、第三集、三聯書店、一九五七年、頁・三四三。
(28) 同註(1)、頁・三九三～四〇〇
(29) 柏田忠一、「支那米輸出解禁問題の将來」下、東亜経済研究所編、東亜経済、大正九年、頁・一八二。
(30) 同註(5)、頁・二二
(31) 同前、頁・二一～二二
(32) 同註(17)、頁・八〇～八一
(33) 同註(30)
(34) 同註(5)、頁・二四
同註(17)、頁・一一三
(35) 実業部国際貿易局編、中国実業誌、湖南省、第二冊、上海、該局印行、民国二三年、頁・五一九
(36) 同註(5)、頁・二七
(37) 同前、頁・二八
(38) 同註(5)、頁・二七
同註(17)、頁・五～六
(39) 同註(17)、頁・二八～三〇
(40) 同註(14)、頁・一六
(41) 同註(18)、頁・五〇七
(42) 農商会報、第一一六期、「近聞四」、一九二四年三月。
(43) 同註(5)、頁・二八
(44) 同註(13)、頁・一四七
(45) 同註(18)、頁・五〇七～五〇八。
同誌に記録された輸出餘力穀米（六〇〇萬担）×当時江西省の精米率（〇・四六％）＝米五七〇萬石
(46) 当時米穀剰餘額（約七、七七〇、〇〇〇石）×精米率（〇・四六）＝三五萬石
(47) 章有義、中国近代農業史資料、第二輯、

(48) 同註(27)、頁・六三二
(49) 同註(17)、頁・一三二
(50) 同前、頁・一三三
(51) 同註(5)、頁・二八
(52) 同註(17)、頁・一三一～一三三。一四七～一五〇。
(53) 同註(17)、頁・一五七
(54) 同註(47)、頁・六三一
(55) 蔡志祥、「二十世紀初期米糧交易対農村経済的影響—湖南省個案研究—(上)」頁・三九七
(56) 同註(17)、頁・一六九
(57) China Weekly Review, Vol.32 No11.(1925) P.317
(58) The China Year Book.1919～1920.P.364
(59) 晨鐘報、一九一七年二月二十日。
(60) 李文治、中国近代史農業史資料、第二集、三聯書店、一九五七年、頁・五二六
(61) 一九一五年長江流域各省の鈔票の実質価値
(62) 安徽：一〇〇％　湖南：五六％
(63) 湖北：八〇％　江西：六七％
同註(55)、頁・三六四
陳翰笙、「中国農民担負的賦税」、章有義、同註(47)、頁・五九二
申報、一九二三年二月三日。
巫寶三、「中国糧食対外貿易」、登雲特、中国救荒史、民国二六年一一月、頁・三四～三五
同註(29)
同註(17)、頁・一一三
農政報告第五巻一二期　一九三七年一二月、頁・三三〇
The Chinese Peasantry "The Communist International", Vol.3, No.6, Dec.30.1926.P.366

(64) 申報年鑑、民国二四年、頁・K・二八より統計
(65) 民国二二年、申報年鑑、頁・五三～五五より統計
(66) 馬乗風、最近中国農村経済諸実相之暴路」、中国経済、第1巻第1期一九三三年四月、頁・二七
(67) 同註(17)、頁・二二二～二二四
表参照

江西省小作農の年収入と支出額の比較(元)

小作耕地区分	収入	田地費用	其他費用	繳租額	差額
百畝以上	775	138	237	310	90
五十畝以上	436	73	179	168	16
五十畝以下	276	42	145	100	−11

資料来源：民国二十二年申報年鑑P・頁五三～五五

(68) 「一九三二年中国農業恐慌底新姿態—農収成災」、東方雑誌、第二九巻第七号、民国二一年一二月一日、頁・九
(69) 「百護照」とは政府が米の移出を担当する商人、商行に発行する許可であり、別商人に護渡することができた。
(70) 蘆然、「洋米麥征税之研究」、銭業日報、第一四巻第二号、専論、一九三四年二月、頁・二〇
(71) 穆藕初、「米貴之原因及補救法」、東方雑誌、第十七巻第五号、一九二〇年八月
頁・一一六～一一七
(72) 同註(24)、頁・二〇
(73) 同註(67)、頁・一一～一二
(74) 同註(24)、頁・三～四
(75) 同註(5)、頁三〇(最近六年來の江西食米輸入数量表を参考)
(76) 同前(74)、頁・三〇
(77) 同前(74)、頁・三〇
(78) 同前(74)、頁・二九
(79) Imperial Maritime Customs, Decennial Reports,1922～1931,頁.323

(80) 湖南省博物館編、湖南全省第一第工農代表大会月刊、一九七九、頁・三六九

(81) 王乗耀、「夾攻状態下的江西農村」、中国経済、第一巻第四、五期、一九三三年八月、P・九